



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

色彩学入門

色と感性の心理

大山 正・齋藤美穂

色彩は人々にとってたいへん身近なものであるが、色彩へのかかわり方はさまざまである。

本書は第Ⅰ部の「基礎編」において色の感覚と知覚、色の測定と表示などの基礎から説き起こし、第Ⅱ部の「色と感性」では色の感情効果、色の嗜好と文化、配色と調和などの色の感性的側面を論じ、第Ⅲ部の「生活環境での応用」では色のデザイン、建造物における色彩設計、色と安全といった応用面に広く及ぶ内容となっており、基礎知識から応用まで、色彩を系統的に解説している。さらに、

コンピュータを用いた色の表示、デザイン、また、いわゆる色覚異常、高齢者の色覚を配慮したカラー・ユニバーサル・デザインについても解説している。

本書の執筆者は色彩心理学者を中心に、色彩工学、色彩デザイン、建築学、生活科学の専門家が担当している。色口絵を多くして、読者の色覚に直接訴えるような配慮がなされている。本書が色彩に興味をもつ読者にとって、いかに色彩と取り組むべきかを知る一助になることを期待する。



編著 大山正・齋藤美穂
発行 東京大学出版会
A5判 / 224頁
定価 本体 3,200円＋税
発行年月 2009年4月

おおやま ただす
元東京大学教授、元日本大学教授。
専門は実験心理学、心理学史。
著書はほかに、『知覚を測る』（単著、誠信書房）など。
さいとう みほ
早稲田大学人間科学学術院教授。
専門は色彩認知科学、感性認知科学。
著書はほかに、『眼・色・光』（共著、日本印刷技術協会）など。

性格とはなんだったのか

心理学と日常概念

渡邊芳之

「人にそれぞれ性格があること」は、私たちが日常的に経験する、当たり前の事実です。ところが、この当たり前の事実を心理学的に研究する「性格心理学」は、実は多くの難しい問題をかかえた研究分野となっています。

本書ではそうした「難しい問題」の原因を、心理学における性格にかかわることば（性格概念）の使われ方や、性格概念の本来の意味と心理学的用法とのズレ・矛盾などを鍵として明らかにしていきます。そのうえで、性格のような「日常概念」を学術用語として用

いようとするときに生じやすい問題を分析し、性格心理学においてこれまで生じてきた問題をどうしたら解決できるのか、今後の性格心理学は性格概念をどのように用いて発展していくべきなのか、などを考えます。

この本が取り扱うような問題はけっして多数の人の興味をひくものではないかもしれませんが、「人のこころや行動について学問的に考える」ときにはかならず誰かが考えていなければならない問題であると信じています。



著 渡邊芳之
発行 新曜社
四六判 / 226頁
定価 本体 2,200円＋税
発行年月 2010年3月

わたなべ よしゆき
帯広畜産大学人間科学研究部門教授。
専門は性格心理学、心理学論。
著書はほかに、『図解・心理学のことが面白いほどわかる本』（共著、中経出版）、『心理学史の新しいかたち』（分担執筆、誠信書房）、『モード性格論：心理学のかしこい使い方』（共著、紀伊國屋書店）、『心理学方法論』（編著、朝倉書店）など。

高座心理学

落語にみる、こころの科学

佐藤浩一



著 佐藤浩一・井上智義

発行 あいり出版

A5判 / 280頁

定価 本体 2,700円 + 税

発行年月 2010年5月

さとう こういち

群馬大学大学院教育学研究科教授。

専門は認知心理学、教育心理学、学習心理学。

著書はほかに、『自伝的記憶の構造と機能』（単著、風間書房）、『自伝的記憶の心理学』（共編著、北大路書房）、『自己心理学4 認知心理学へのアプローチ』（分担執筆、金子書房）など。

本書はまじめな心理学書であり、二人の著者もまた、まじめな心理学者です。二人はごく普通に研究の話をして、ごく普通に執筆の相談を進めました。でもただ一つ違っていたことは、二人とも落語ファンだったことです。

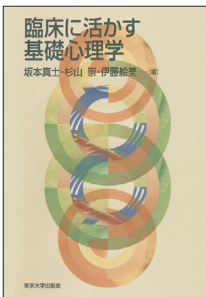
あらためて落語を聴き直してみると、このマクラは「条件づけ」、この噺は「トッパダウン処理」、あの主人公は「拒食症……」という具合に、心理学的な素材がたくさん見つかりました。そこで落語からネタを拝借して、心理学の概説書を執筆した次第です。

内容は知覚や記憶、認知などの基礎心理学から、コミュニティ心理学や対人心理学、臨床心理学まで幅広くカバーしています。ですから心理学の講義用テキストにも安心してご活用いただけます（楽しく学ぶと学習効果も高まるそうです!）。

さらに、心理学から「笑い」を分析する章や、英語落語でご活躍の桂かい枝師匠との対談も含まれました。ユーモア研究に関心をおもちの方にも、ぜひお読みいただきたいと思います。

臨床に活かす基礎心理学

坂本真士



編著 坂本真士・杉山崇・

伊藤絵美

発行 東京大学出版会

A5判 / 288頁

定価 本体 3,000円 + 税

発行年月 2010年3月

さかもと しんじ

日本大学文理学部心理学科教授。

専門は社会心理学、抑うつ、自己、自殺。

著書はほかに、『ネガティブ・マインド』（単著、中央公論新社）、『自己注目と抑うつの社会心理学』（単著、東京大学出版会）、『大学生における精神的不適応予防に関する研究』（共著、風間書房）、『臨床社会心理学』（共編著、東京大学出版会）など。

一つの「教義」にかぶれることなく、地道にクライアントのための臨床をめざす臨床家の方、あるいは基礎心理学研究者で臨床心理学に興味のある方は、本書をぜひお読みいただきたい。

本書では、基礎と臨床の絡みを重視した。まず基礎心理学諸領域で臨床に関わる先端的な知のエッセンスを、研究者の方々にご説明いただいた。次にそれらの臨床への活かし方を、臨床家の方々からご説明いただいた。さらに基礎心理学とその活かし方との両方について、臨床・基礎の両サイドから

コメントを頂戴し、臨床と基礎とのコラボレーションを最大限に図った。

世は龍馬ブームである。「攘夷じゃ開国じゃ言うちよらんと、この国が一つにまとまらんといかんぜよ!」さて、心理学界も同じ情況じゃないだろうか。「臨床じゃ基礎じゃ言うちよらんと、心理学界が一つにまとまらんと、こころの健康は守れんぜよ!」——そう叫びたい。世界中の心理学研究者が明らかにした知見は、臨床に活かせないのか。本書を手にとって、一緒に考えてほしい。